

〔解釈と鑑賞〕昭52・10)、『古代詩論の方法試論(その5)』

〔文学史研究〕5号)で論じた。

三、「恋ひ」

近藤信義

三 「恋ひ」

昭和五十年四月～五一年四月の一年にわたった大野晋と渡部昇一の論争(言語・大修館)はまことに興味深かった。発端は岩波古語辞典(昭和四九年十二月)を特色づける上代特殊仮名づかいによることばの語源的解釈に対する渡部氏の疑問に発する。けんかの仕方まで教えてくれるこの論争で問われたことはいくつかのポイントがあるのだが当面私に与えられたテーマとかかわるのは、語源解釈において甲乙問題が果す有効性ということである。大野氏はすでに「日本語をさかのぼる」(昭和四九年十一月)において、上代特殊仮名づかいをその武器の一つとして、古代日本人の世界像を言語面から解明にむかわれている。だがこの書物の出版後(文学・岩波書店)において直ちに交わされた、論争阪倉篤義(昭和五十・四)大野晋(同六月)阪倉(同十月)や又別に母音体系の問題から(言語・大修館)誌上で交わされた、大野晋(一九七六・八)松本克己(同十一月)の論争等から垣間見ると、未だこの語学内の領域に多くの問題をはらんでいることが知られる。

上代特殊仮名づかいの研究史は既にも著大なことだが、本居宣長に発し、石塚竜暦「仮名遣奥山路」(寛政十年)に引きつがれ、近代に至って橋本進吉の新たな研究を生み、大野晋に受けつがれる。橋本進吉が記紀、万葉集の用字法を検討して古代十三音中に

甲乙二類の書き分けのあることを発表したのが昭和六年九月「上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法」(国語と国文学)であった。

折口信夫が「恋及び恋歌」(新潮)を発表したのは昭和九年八月である。

こふと言ふ語には一方、乞・請或は古く稀に「祈」に当るこふなど、宛て字する所謂四段活用のものがある。軽はずみな事は言へぬが、上二段活用と謂はれるものの含む所に、形式は問題外として古意が存して居り、「乞ふ」「請ふ」と謂った例は、意義の分化したものが普通だと見ねばならぬ様である。(全集第八卷二五二頁)

恋と言ふ字面を思ひ浮べる前に、かくまで煩しく、くり返して来たのだから、「魂こひ」と言ふ熟語が思ひ浮べられる様になって来た事と思ふ。

万葉時代すら既に、気どった人々があつて、「こひ」に「孤悲」など言ふ文学的字面を当てゝある。さう謂った独り思ひに耽つて居るものではなかったのが、わが民族の昔の「恋」であつた。声に出し呼ばゝつて、人の名を唱へたものである。つまり招魂と言へば誰にも納得のゆく事である。遠くにある魂を招き

日と火、神と上、目と見等を取りあげ「意味上の類縁関係は否定できないだろう」という。こうした指摘のように、ことばの持つ意味概念や古代日本人のことがらの認識法を根本から問い直そうとする方向性を根強く持ち続けていた。

甲乙二類の書き分けは何に由来するのか。この間はくり返し問い続けなければならないが、この間の中から、古代日本語の特質に「類」と呼んでとらえられる思考法を見出し、甲乙二類のあり様もこの中に含みこんでとらえようとするのが中西進（万葉のことば―その「類」について・シリーズ古代の文学2・昭和五一・九）である。氏によれば例えば「ひーふ みーむ よーや」のような倍数。「こ、そ、か」の指示代名詞。「オニューヲツ オキナ・オミナーヲ ミナ」等の反対語。「シノフーシノブ」の清濁、等々これらの相関々係はいずれも『類』の意識があつて、両者は類似と相違をもつていたのではないかとみる。こうした類概念の中の一つのあり様として甲乙二類の書き分けをとらえ、例えば「神―上」「日―火」「恋―乞」も、従つて「同質なる他者という観念」が存するが故に「区別を示すばあいの『類』が発生して来るのではないか」とみる。更に掛け詞なる表現の方法もかかる思考法の上に成り立っていると展開する。中西論文の提案によつて甲乙問題にようやく解明の方向が一つ示されたように思われる。

概説風に「恋ひ」にかかわつて甲乙問題のたどつた過程を述べてきたが、折口信夫が示した上代特殊仮名づかいへの否定的態度は、それを有力な根拠とする言語解釈に対して、根強い保塁となつた。

「恋ひ」は「魂ごひ」に発するとする折口説の魅力が、甲乙二類の書式の現象を越えて、古代日本人の言語世界を予測せしめるからである。従つて甲乙問題はこの言語世界へ立ち入る発端である。折口信夫の存在がこの入口に立っていることも事実であろう。

ここで改めて折口学として「恋ひ」の問題に立ちかえると、折口の言語の世界に対して持つ思想に向き合わされる。一見立ちふさがり現象的事実を越えて「魂ごひ」と発想できるのは何か。例えばごく最近、佐々木重治郎に折口信夫の「一語多義的」な思考感覚をとらえ（八心思兼神―折口信夫の言語と世界・折口博士記念古代研究所紀要第三輯・昭和五十・三）折口学の総体に深くがかわる発想法とみる好論がある。この発想法は折口信夫の言語観に由来するわけで、折口論の展開はまさしくこうした思想と向き合つて始めて可能となることだろうし、ようやくその緒につき始めたことを感じさせる。だがしかし八心式発想法（高崎正秀の名づけた折口信夫の一語多義的発想法）をもつて「恋ひⅡ招魂」が発想されたにしても、なぜそのように発想されるのかと問う時、依然として問はもどつてこない。折口信夫の詩人的感性に由来するとしかいかいえない暗闇の部分に引きずり込まれて、結局「学」として成り立つべき明確さが生まれてこないのではないか。

折口信夫の言語観が、直覺的に古代世界を見通しているごとく感ぜられる感性が、証拠立てを必要とする「学」の世界で、何をどのように支援してくれるのか今改めて問い直したい。